

Graduate

神戸大学卒業生のご紹介

起業家として女性として、ますます輝く卒業生たち

今回は、様々な分野で活躍する女性をキーワードに、卒業生にスポットを当てて、ご紹介したいと思います。このように神戸大学卒業の方々が、多方面で活躍されている様子は、頼もしいかぎりです。

株式会社オフィスあん代表

松下 直子 (1994年文学部卒業)

神戸大学在学中は、国史学を専攻し、奈良時代の国家統治について研究していました。ひとつの仮説を持論として述べるためにはどんな情報が必要で、何を根拠や基準にすればよいのか、また、他者の持論の論点をつかむためにはどうすればよいのか、逆に自分がどう表現すれば人に伝わるのかなど、働く際に必要な「考え方」を学んだように思います。4年間、たくさんのお会いと別れがありました。一番印象的なのは、現在の夫との出会いです(笑)。同じゼミに所属し、共に学び、互いの卒論に対して議論を交わしました。その夫は、今も神戸大学で研究を続けています。私が大好きだった学問の研究を今も続けている夫をうらやましくも思い、また、尊敬しています。卒業して17年経った今でも、夫を通じて、母校の「今」を知ることができるのは、うれしいかぎりです。

大学時代を漢字一文字で表すと『彩』。私には、学部やゼミ、クラブなど、たくさんの居場所があり、そこでのいろいろな経験が、何色もの彩(いろどり)に満ちていました。当時はバブル絶頂期で、世の中もキラキラしていました。皆、ハチャメチャで元気で豪快で…。でも、勉学に関しては真面目でした。大いに遊び、大いに学ぶ。もしかしたら、今の仕事の価値観は、神戸大学で培われたのかもしれない。

卒業後に勤務した食品メーカーで、営業、広報とキャリアを重ねる中で、人事という

奥深い仕事に出会いました。これを生涯の仕事にしたいと思い、今があります。起業したかったというより、自然の流れの中で起業していた、というのが正解でしょうか。当時「5年後には貸切バスで、スタッフの家族も連れて社員旅行に行きたい」と夢に描いていましたが、おかげさまで、5年半後には実現できました。たった1人で起業したのに、社員旅行のバスには17名が乗っていました。事業を大きくするだけではなく、しっかり仕事をして、しっかり遊んで、そして、しっかり笑う。私は、会社をそんな「場」にしていきたいと思っています。

母校に望むのは不易流行。世間では「事業仕分け」が流行っていますが、守るものと捨てるものを正しく見極められる大学こそが、50年後、100年後も、次代の人材を輩出できる「場」になれるのだと思います。

神戸大学は私にとって、卒業して何年経っても、ここに戻ってくれば「おかえり」と言ってくれる場所。だから私も「ただいま」と言いたくなるのでしょう。それが、母校だと感じます。皆さん、このホームカミングデイで、「ただいま」って言いながら、わが母校の門をくぐりましょう！

